
【VOCALOID】ラノベにおけるおかゆの効果について

ピーナッツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【VOCALOID】ラノベにおけるおかゆの効果について

【コード】

N7680Z

【作者名】

ピーナッツ

【あらすじ】

リンとミクのほのぼのしたええ話系の物語です。

朝から雨が降っていた。

しとしとと弱い雨だが、同じ調子ですつと降り続けている。空は均一な灰色の雲に覆われ、当分やむ気配はない。

朝食のテーブル。

ミク、ルカ、リン、レンの四人が食卓を囲んでいる。

「ルカ姉、今日あたしが夕飯作っていい？」

フレンチトーストをかじりながらリンが聞いた。

「いいけど、何作るの？」

「パエリア」

ふーん、とルカは思った。

この前、リン使いで有名な四葉Pに、録音のあと食事に連れてってもらったと言っていた。

そのとき食べたパエリアがすごく美味しかったのだそう。自分でも作ってみたくなったのだろう。

「いいわよ。レシピ分かる？」

「うん、ネットで調べた。後で材料買ってくるね」

食事は普段ルカが作るが、彼女がいないときはリンが炊事当番だ。

リンは元々何でも器用にこなすし、ルカが仕込んでいるので基本的

な料理はそつなく作れる。

そして、女子力アップのため、時々はその手込んだ料理に挑戦するのだ。

料理の腕前がジャイアンレベルのミクとは、雲泥の差である。

夕方。シンクにパエリアの材料がずらりと並ぶ。

あさり、イカ、エビ、トマト、玉ねぎ、パプリカ……。

エプロンを着たリンの後ろから、ミクがのぞきこむ。

「ミク姉、美味しいの作ってあげるから、待っててね」

「ネギ入んないの…?」

「入れないわよ。ネギ食べたかったら自分で何か作って」

リンがテキパキと下ごしらえを始める。

手早くイカをさばき、慣れた手つきでトマトの皮を湯剥きする。十四歳とは思えない手際の良さだ。

リンの邪魔にならないよう小さくなりながら、ミクがたどたどしい手つきでネギを切る。

リンがフライパンにオリーブオイルを引き、玉ねぎを炒める。続いて魚介類。食欲をそそる香りが広がる。

ミクが調味液を準備する。茶碗に醤油とみりん、酢を目分量で入れる。

リンがフライパンに米とスープを投入する。
サフランを入れると、タンポポのような温かみのある黄色に米が染まった。

リンの横で、ミクがネギを炒める。
ネギがしんなりしてくると、先ほどの調味液を加えた。
ジュワーツという音と共に酸っぱい匂いが立ち上る。

「…ミク姉、これ酢の匂い？ 入れ過ぎじゃないの？」

「ちょっと多目がいいんだって」

スープが沸騰してきたので、リンが火を弱くする。
後は水分を飛ばすだけだ。

ミクは不器用な手つきでフライパンをあおっている。
リンは心配げな顔で姉の調理を眺めていた。

夕飯の食卓に四人が揃う。
テーブルには二つの皿が並んでいる。
色鮮やかなパエリアが盛り付けられた大皿。
色的にはかなり地味な、ネギの煮付けの小皿。
戦わずしてネギが敗色濃厚だ。

「美味しそう。頑張ったね、リン」

ルカが感心する。

「エへへ」

リンが皆にパエリアを取り分ける。

「いただきまーす」x 4

スプーンですくったパエリアを一口食べるなり、ルカはアレ？という顔になった。

水分が抜けきつておらず、ライスがベシヨっとしている。

それに、魚介類の生臭さが残っている。

食べられないほどではないが、はつきり言って不味い。

チラッと周りを見ると、レンもミクも食が進んでいないようだ。

リンはというと、額に斜線が入って絶望した顔をしている。

「…いいよ、みんな…無理して食べなくても…」

怪談でも話すような声でリンが言った。

慌ててレンがフォローする。

「リ、リン、大丈夫だって。イカがさ、ちょっとアレだけで、あとは良く出来てるよ！」

「でも…」飯もベタってしてるし…」

「初めて作ったのに完璧に出来るわけないでしょ。後でコツ教えてあげるから、そんなに凹まないの」

ルカが慰めてもリンはますます落ち込んでいく。

ミクの料理がひどいと笑い飛ばせば元気も出るだろうかと思って、ルカはネギを一本、口に放り込んだ。

思惑は外れた。ルカは思わず「美味しい…」とつぶやいてしまった。醤油とみりんだけではくどい味になってしまっただろうが、多めに入れた酢がさっぱり感を出しているので、実にさわやかな味わいだ。それに、ネギを炒めるのに使ったバターが、味にアクセントを与えている。

「ミツカンが酢を使った料理を募集して、賞を取ったレシピなんだって」

ミクが言った。なるほどとルカは思った。

レンもひと口食べる。気を使って表情に出さないようにしているが、美味しいと思っているのはバレバレだ。

みんなの様子を見て、リンもネギに箸をつけた。目の前に持ってきてしばし眺め、口に入れる。ひと噛みするなり、ガーンという音が聞こえそうな表情をした。悔しさにリンの顔がゆがむ。

リンは負けず嫌いなので、持ち歌の数やキャラクターグッズの売り上げで大きく水をあけられているミクに、対抗心を持っている。人気に関しては差が大き過ぎて敵うべくもないが、それだけに得意分野で負けるのは何より悔しいのだ。

気まずい夕食の後、リンは部屋にこもってしまった。

皆の食器をルカがシンクに持っていく。
残ってしまったパエリアは、仕方なくゴミ箱に捨てた。
悲しそうなリンの表情を思い出すと、胸が痛む。
食器を洗いながら、傍らのミクに話しかける。

「ミク、悪気はないとはいえ、あなたもタイミング悪いわね」

「ゴメン…。リン、可哀想だったね」

「洗い物終わったらフォローするけど、何て言ったら…」

ガチャツとドアが開く音がした。

暗い顔のリンがキッチンに来て、ミクに携帯電話を差し出す。
泣いていたのか、目が赤い。

「…四葉Pさんから。ミク姉に代わって…」

空気が張り詰めた。リン使いの四葉Pをリンは尊敬し、慕っている。
ミクが携帯電話を受け取る。ルカは不安げに見守っている。

「…もしもし、お電話代わりました、ミクです。はい、え？ 今か
ら？ …はい、えーと、いえ、都合悪いんじゃないですけど、…分
かりました。では、後ほど」

携帯電話を切ってリンに返す。ミクの顔がこわばっている。

「…ミク姉、四葉Pさん、何て…？」

ミクは躊躇ったが、ごまかすわけにもいかない。

「…歌って欲しい曲があるから…今から来て…」

リンの顔から、すっと血の気が引いた。

リンはまた部屋にこもってしまった。
すすり泣く声がドアの外まで漏れてくる。

「…悪いことつてどうしてこう重なっちゃうのかしら…落ち込んでるときだったから四葉Pさんに捨てられたと思っちゃったのね」

ドアの前でルカが溜息をつく。

「あたし…どうしよ」

不可抗力なのだが、すまなそうな顔のミク。

「ミクはPさんのとこ行ってきなさいよ。ボーカロイドが歌の依頼断るわけにいかないでしょ」

「行くけど…。ねえ、あたし、四葉Pさんに会ったことあるんだけどさ、とっても優しい人で、リンのことすごい気に入ってるの。リンが心配してるようなこと、絶対無いと思うよ」

「そう…。でも今は話しかけられる状態じゃないしね。あなた早く行ってきなさい。リン、たぶん朝まで出てこないわよ」

「…そうする」

ミクは支度をすませると、傘を差して出かけて行った。
ルカは時々ドアの前で耳を澄ませ様子をうかがっていたが、十時を過ぎたころからは物音が聞こえなくなつた。

「泣き疲れて眠っちゃつたのかな…明日少しは元気出ればいいけど…」

鍵も掛かつてるし、もうできることはない。

「…しょうがないな。あたしも寝よ」

深夜二時。ベッドでリンがふと目を覚ました。
枕がぐっしょりしている。

(…そつか、泣きながら眠っちゃつたんだ…)

パエリアと四葉Pのことを思い出して、胸がチクリとした。

…喉渴いた。

リンはもそもそとベッドから起き上がった。

常夜灯だけがついた薄暗いキッチン。

食器棚からコップを取り、冷えた麦茶を取り出す。

冷蔵庫のドアから漏れる光が眩しくて、目を細めた。

トポトポと麦茶を注ぎ、喉を潤す。

「…リン…」

暗がりから突然名を呼ばれてリンはビックリした。振り向くと廊下にミクが幽霊のように立っていた。

「ミ、ミク姉！ ビックリさせないでよ！」

ミクは出掛ける時に来ていた服のままだ。

「…今帰ったの？ 遅かったのね…」

「リン、この前、四葉Pさんここで新曲録音してきたでしょ」

ひどく声が震れている。喋るのもつらそうだ。

「ミク姉！ どうしたの、その声!？」

「今日のお仕事ね、その曲のコーラスだったよ。四葉Pさんね、リンの声大好きだって」

ミクはそれだけ言つとよるめきながら自分の部屋に行き、着替えもせずベッドに倒れこんだ。

リンが慌てて後を追い、ベッドのそばに膝をついてミクに話しかける。

「ミク姉、どうしちゃったの？ こんなフラフラになっちゃって…
声も…」

ミクはうつ伏せで枕に顔をうずめている。

「…リンのキーに合わせないといけないから、音が高くて高くて…」

枕越しに聞こえる囁れた声。聞いているだけで痛々しくなってくる。

「…四葉Pさんは『それじゃリンの声が生きない』って、何回でもやり直しするし…妥協を許さない人なのね、あの人…」

「そうだったの…」

リンがミクの背中をさする。

「…ミク姉、ゴメンね…あたし、一人で落ち込んで…」

いいの、とミクは言った。

「お姉ちゃん、何か欲しいのある？ 飲み物は？」

「…お腹は空いてるんだけど、食べたいような食べたくないような

…」

「疲れてるからだよ。おかゆ作ろうか？」

身体がピクツと反応した。

「食べたいのね？ 鰹ダシがいい？」

「…白かゆの方がいい…でもネギは入れて」

「分かった。ちょっと待っててね」

湯気が立つおかゆをトレイに乗せ、リンがミクの部屋に戻った。ミクは自力で服を脱ぎ、タンクトップとショーツ姿で寝ていた。

「お待たせ」

ネギの臭いを嗅ぎつけ、むくつと起き上がる。

ミクは髪止めも外している。

ツインテールをほどいたミクは普通の女の子みたく、また別の可愛いらしさがあるとリンは思う。

リンがベッドに腰掛け、マットレスの上にトレイを置く。

おかゆとネギの良い香りが部屋に広がるが、ミクはなぜか手を付けない。

しばらくの間、二人は無言でおかゆをじっと見つめていた。

「…ミク姉」

「何？」

「ここはやっぱり、『ふー、ふー、あーん』しなきゃだめかな」

ミクが腕を組む。

「そうよね、ラノベでおかゆときて『ふー、ふー、あーん』しなかつたら、ラノベの神様から天罰が下るわよね」

「ラノベの神様っているの？」

「いるわよ、日本は八百万の神の国だから。三途の川を渡るとラノベの神様がいて、お前は『ふー、ふー、あーん』をしなかつたから、

来世はオキアミだって言うの」

「嫌よ！ そんな地味な生き物！ 来世もボカロか人間がいい！」

「人間でもいいけど、職業はテープ起こしよ」

「うわあ、それも嫌… 職業を卑下するわけじゃないけど、絶対あたしには向いてない… ミク姉、『ふー、ふー、あーん』してあげるから、食べて」

リンはスプーンでおかゆを掬うと、息を吹いて冷ました。

「はい、あーん」

リンがミクの口元にスプーンを寄せる。

ミクが照れて笑う。

「きゃあ、リン、これ恥ずいよ、結構」

「食べないとミク姉の来世、フジツボだよ」

「フジツボは嫌。食べる」

ミクがあーん、と口を開けた。

きれいに並んだ歯と、ピンク色の舌がちらりと覗く。

ちよっとドキッとした。

いつも一緒に食事しているのに、なんだかエッチな感じがする。距離が近すぎるのだ。

ミクがはむ、とスプーンを咥える。

スプーンを通して柔らかな舌の感触と、コツリと歯が当る感触が伝

わる。

赤ちゃんに食べさせてみたい とリンは思った。

唇に挟まれたスプーンをゆっくりと引き抜く。

おかゆのとりみで艶っている唇を、ミクがぺロツと舐める。

「美味しい」

もぐもぐとおかゆを食むミク。

あまりの可愛らしさにリンが身悶えする。

「リン、どうしたの？ クネクネして？」

「…ミク姉…か、可愛すぎ…」

「え？ そっ？」

ミクが赤くなる。

リンはドキドキする胸を押さえている。

「あー、やばやば。惚れるところだった。すごいわね、おかゆパワー」

「そんなに？」

「食べるときの顔も可愛いけどさ、スプーンから伝わってくる感触が何とも…」

「へー、自分じゃ分かんない」

「じゃあさ、あたしに『あーん』やってみて」

リンがスプーンをミクに差し出す。

「いいけど、もろ間接キスだよ、いい？」

「いいよ」

今度はミクがおかゆを吹いて冷ます。

「あーん」

リンがスプーンにぱくりと食らいつく。

幼いリンの仕草は、ミクに輪をかけて可愛い。
ミクの顔がボツと赤くなる。

「…リン、結婚して」

「ね、そうなっちゃうでしょ」

「あー、びっくりした。なるほど、これは悩殺ね」

火照った顔をパタパタと手で扇ぐ。

「面白いけど、こんなことしてたらおかゆ冷めちゃう。ミク姉、お椀とスプーンちょうだい。食べさせてあげる」

二、三回も「あーん」してあげればラノベの神様への義理は果たせられると思われるのだが、結局リンは全部「あーん」でミクに食べさせ

た。

「あー、美味しかった。喉も良くなったみたい」

好物のネギのおかげか、ミクはすっかり元気になった。

「良かった、ミク姉が元気になって」

「ありがとう、リン」

ミクがにっこり微笑む。

天使と呼ばれているだけあって、ミクの笑顔は天下一品だ。おかゆパワーが持続しているのか、胸がキュンとしてしまう。

「…ねえ、ミク姉、聞きたいことあるんだけどさ…」

もじもじしながらリンが言った。

「なあに？」

「…ルカ姉とキスしたとき、どんな感じだった…？」

ミクが決まり悪そうな顔になる。

「やあね、まだ気にしてたの？ その話」

「教えてよ どんな感じなの？ キスって」

声が切実だ。

あたしもこんな感じでルカに迫ったのかな。

「どづって…気持ちよかったけど…」

リンがちよっと怒った顔になる。

「そんだけじゃ分かんないよ。どんな風に気持ちいいの？」

困り顔のミク。

「…溶けちゃいそうな感じ…って言ったら分かる？」

「分かんない」

「もう、言葉で説明できないよ」

あ、言っちゃいけないこと言っちゃったかな、とミクは思った。
リンの顔がふわっと赤くなる。

「…あたし、知りたいな…」

ベッドの上でミクににじり寄る。

ミクは焦って後ずさった。

「ちょ、ちよっと、リン。大切にとっとくって言ったでしょ」

「ミク姉だけ知ってて、ずるい」

潤んだ瞳でミクを見つめる。

甘えるリンは抱きしめたくなるほど可愛い。

「…いつもはあたしに突っかかってくるくせに。ルカじゃなくないの？」

「あたし、ミク姉がいい。ねえ、教えて、あたしにも…」

多分この世にこれ以上可愛い生物はいないだろうと思える表情でリンは言った。

ミクの中で何かがぶちっと切れた。

「…もう、一度だけよ」

「…うん」

「…目を、閉じて…」

そっと唇を寄せ合うミクとリン。

このとき、二人は気付いていなかった。

ドアが少しだけ開いていて、部屋の灯りが廊下に漏れていたこと、夜中に目を覚ましたルカが、灯りに気付いてミクの様子を見にきたことに。

「ミク、遅かったのね」

あと一センチで唇が触れ合うところまで、ルカがドアを開けた。ビクツとして硬直する二人。

ルカは一瞬訳が分からず呆然としたが、状況を呑み込むとピンク色の髪がざわざわと逆立ちはじめた。

「ル、ルカ！ 違うの、これは…」

違うのと言いつつ、うーん、見たまんまよね、とミクは思った。

「ミクー！！！！ あんた、リンに何してんの　！！！！」

ルカが飛びかかり、両の拳でミクの頭をグリグリする。

「痛いー！！　痛い痛い痛いー！！」

スタイルを維持するため筋力トレーニングを欠かさないルカは、四人の中で一番腕力がある。

リンはこそこそと壁づたいに部屋を出て、そーっとドアを閉めた。

ドア越しにミクの悲鳴が漏れ聞こえてくる。

「ミク姉、ごめんなさい」

そうつばやくと、リンは自分の部屋に避難した。

「あー、恐かった。あ、雨止んでるみたい……」

夜が明けると雨はすっかり止んでいた。

鬱陶しく覆いかぶさっていた雨雲はきれいに姿を消し、清々しい朝日がリビングに差し込んでいる。

「…ルカ姉、機嫌悪いの？」

朝食のハムエッグを食べながらレンが聞いた。

ルカはツンとして、起きてからほとんど口をきいていない。

ボクには覚えがないから、矛先はミク姉かリンだろう。
何か二人とも縮こまってるし。

「この二人ね、昨日キスしようとしてたのよ」

ルカがぷりぷりしながら言った。

「ルカ姉、アレはおかゆ効果だってば」

「なんだよ、おかゆ効果って？」

眉をひそめレンが聞く。

「ラノベにおけるおかゆの惚れ薬効果のことよ。アレのせいでフラフラとそんな気になっちゃっただけなんだから。いま別にミク姉とキスしたくないもん」

そうやってリンはトーストを齧った。

レンはますます意味不明といった顔になる。

「ひど、リン、あたしあんたのせいでグリグリされたんだからね」

「何にせよ、ミクが自重しなきゃいけないでしょー!」

また怒られてミクがしゅんとなっていて、携帯の着信音が鳴った。

「あたしだ」

リンが走って取りに行き、電話を受ける。

話し声が聞こえる。声が明るい。

通話を切ると上機嫌で戻ってきた。

「四葉P様から」

「あなた『様』付けて呼んでたっけ？」

ミクがあきれ顔になる。

「この前収録した曲ね、録り直したいところがあるから、ミク姉も一緒に来てって」

「あ、あたし、まだ喉の調子が…」

昨日のスパルタ調教を思い出して、ミクはわざとらしく咳払いした。

「そう？ 録音終わったらランチご馳走するって言ってたけど、無理ならあたしだけ行って来るね」

「あゝ。うん、もう大丈夫みたい」

「調子いいんだから」

みんなで声をあげて笑う。

「リン、新曲って、どんな歌？」

レンが聞いた。

「素敵な曲よ。こんな感じ」

リンがアカペラで歌う。

アップテンポの、思わず身体が動いてしまっような曲だ。
ルカとレンがリズムに合わせて手を叩く。

「初恋の歌なのね。メロディー可愛い」

サビになるとミクがコーラスを合わせた。
心から楽しそうに歌うリン。
リビングが、二人の明るい声に包まれる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7680z/>

【VOCALOID】ラノベにおけるおかゆの効果について

2011年12月25日01時51分発行